



Title	母語話者信仰を支える「言説」批判：日本のドイツ語教育に関する分析を手がかりに
Author(s)	中川, 亜紀子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49476
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【7】

氏 名	中 川 亜 紀 子
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 2 2 3 9 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 20 年 6 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	母語話者信仰を支える「言説」批判ー日本のドイツ語教育に関する分析 を手がかりにー
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 我 田 広之 （副査） 教 授 金 子 元臣 教 授 日 野 信行

論 文 内 容 の 要 旨

異言語教育／学習では、「母語話者は非母語話者よりも優れている」、「母語話者の言語能力に非母語話者である学習者は到達しなければならない」、したがって「母語話者の言語使用を非母語話者は真似なければならない」といった、母語話者の優位・特権性を主張する見解が根強く存在する。本研究の目的は、このような主張が正当化される際に持ち出される議論が、実は正当性に乏しいことを示すことにある。本稿の前半部分ではフィールド調査におけるデータとその分析から、母語話者の権威が異言語教育の場で生み出される様子を描写する。後半部分では、前半のデータにおいて主張されていた母語話者の優位に繋がる議論が、いかに人々の思い込みでなされているもので根拠に乏しいものか指摘する。

第1章では、「ネイティブスピーカー」という概念をめぐりこれまでになされてきた議論を整理する。この用語はあらゆる場面で用いられているが、多くの場合その意味するところが改めて問われることはほとんどない。しかしながら、一般に想定されているようなネイティブスピーカー＝母語話者という捉え方を検証してみたとき、そこにはいくつかの問題点がみられる。というのも、我々がネイティブスピーカーという用語で想定する言語能力は、必ずしもすべての母語話者が有しているわけではなく、またそこでいわれる言語能力の定義にも曖昧さが残るからである。したがって、母語話者をモデルとした異言語教育／学

習にも多くの矛盾と疑問が生じる。にもかかわらず、現実には母語話者への信仰は根強く存在すると思われる。それはなぜなのだろうか。その要因を探るべく、以下の章ではフィールドワークで得られたデータの分析を試みる。

第2章・第3章では調査対象と調査方法について述べる。調査対象は日本のドイツ語の語学学校における初級の2クラスである。教師はドイツ語母語話者、受講者は日本人の成人学習者である。授業の参与観察、インタビュー、アンケートを行い、第4章でその結果を分析した。具体的には、母語話者への信仰がどのような言説に基づき支えられているか、授業における会話やインタビュー内容などから考察した。その結果、母語話者への信仰が、当該言語を用いる際に必要であるとされる社会文化的な知識を母語話者が特権的・独占的に有しているという想定によって生じている点が確認された。もちろん、すでに先行研究で触れられているように、母語話者を非母語話者よりも優位にみる根拠としては、他にも文法的正確さ、語彙力、発音、あるいは流暢さなどを挙げることもできるかもしれない。しかし、今回の分析からはそのような意見も若干あったとはいえ、それらの側面よりもむしろ社会文化的な知識を母語話者が非母語話者より優れている根拠として挙げる意見が多数を占めたといえる。それは、教師側からも学習者側からも聞かれた声であった。しかし、その根拠に基づき母語話者の優位性が語られる際に矛盾もみられた。この結果を踏まえ、本稿の後半部分となる以下の章では、この根拠の脆弱さについて議論する。

第5章では、言語使用と社会文化的な知識を結びつける契機になったといわれるコミュニカティブ・アプローチの理論的源泉を探ることで、発話とコンテキストの関係について考察する。この教授法はJ. Austinの言語行為論に影響を受け発展したが、そこには従来の教授法の問題点を克服する様々な利点が認められる。しかし、その一方で、発話とコンテキストが絶対的なものとして捉えられたときに問題が生じる。つまり、母語話者の言語使用と彼らが有するとされるコンテキストが絶対的に結びつけられ、母語話者への信仰が無批判的に保持されるという問題である。そこでは、母語話者の言語使用がオリジナルとされ、絶対的権威のもとに置かれることになる。それに対し、非母語話者である学習者の言語使用は母語話者の言語使用に寄生するものとされ、排除される傾向にある。しかしながら、J. Derridaが指摘したように、言語の記号としての特性により発話は反覆可能である。だからこそ、同じ発話が異なるコンテキストで用いられることが可能となる。したがって、母語話者の発話とそのコンテキストは絶対的なものではなく、どのような発話も常に無限のコンテキストと結びつき新たな意味の地平を開く可能性を有していることになる。それではなぜ、母語話者の言語使用とコンテキストは絶対的なものとして結びつけられてしまうのだろうか。その要因を次章で探る。

第6章では、異言語教育における権力について考察する。母語話者の言語使用とそのコンテキストが絶対的なものとして結びつけられる背景には、慣習という名のもとで、ある言語使用を「正しい」とし、他の言語使用を排除しようとする言説とそれを支える権力の存在を見てとることができる。ただし、そこでの権力とは、一方から他方に抑圧的に働くものではなく、当事者達によって協同的に保持されているものである。この権力の存在により、「適切な」言語使用に「適切な」コンテキストもしくは「適切な」慣習が結びつけられてきたといえる。この「適切さ」という用語は、異言語教育の場では頻繁に登場するが、現実の社会言語学的な状況を反映したものではない。それは、他の変種を排除し一つの変種を元に社会言語学的なヘゲモニーを打ちたてようとする点で政治的なプロジェクトだといえる。

「慣習」という観点とは、どのような言語使用が適切かを判断する際にしばしば持ち出されるが、第7章ではこの言語使用と慣習の関係について検討する。言語使用と慣習の固定的な捉え方は、これまでの多くの異言語教育／学習において母語話者への慣習の一致が暗黙的に目指されてきたことと無関係ではない。しかし、言語と慣習の関係を問い直してみたとき、コミュニケーションの成否は慣習によっては決定されないことがわかる。D. Davidsonは、コミュニケーションの成立はそのつどの発話の場面にかかっているとし、慣習は言語的コミュニケーションの性質を説明する助けにはならないと主張した。それにより、コミュニケーションの（寸分たがわぬ）反復性を否認した。たしかに、言語と慣習の関係をもっともらしく見せる社会的秩序の存在はP. Bourdieuが指摘したところである。Bourdieuにとって、ある発話行為が適切であるか否かは言語そのものとは関係のないまったくの言語外的行為であり、言語的实践の可能／不可能は社会の側から説明できることになる。しかし、J. Butlerが述べるように、社会や慣習は固定的なものではなく、我々はそれらに決して完全に縛られてはいない。そこから逃れ、「適切」といわれる言語使用を「不適切」に用いてみることで新たな発話と慣習の関係を生み出す余地が残されている。既存の言葉を用いつつ新たな地平を切り開く可能性、Butlerが示唆するその可能性は柔軟で寛容な異言語教育／学習に繋がるものと思われる。

なお、「ネイティブスピーカー」、「ノンネイティブスピーカー」という用語であるが、いくつかの先行研究に倣うならば、前者は「言語運用能力の高い話者」、後者は「それにまだ達していない話者」と位置づけることができるかもしれない。しかし、そもそも言語は、それぞれがそれぞれの必要・状況に応じて用いるのが現状であり、そこに序列をつけるのは相応しくないともいえる。また、ネイティブスピーカー／ノンネイティブスピーカーといった用語は、現実の言語学習あるいは実際のコミュニケーションを考えた場合、それほど有効な概念ともいえない。なぜなら、どのような基準に基づきネイティブスピーカーの言語能力を規定するか、曖昧な部分は尽きないからである。我々一人一人が異なった文化的背景知識を持ち言語を用いる以上、そこでの言語能力もおのずと一人一人異なったものになるだろう。この点において、言葉を用いるということは、多種多様な文化を持った様々な人たちと交流することを意味する。C. Kramschは、ネイティブスピーカー／ノンネイティブスピーカーではなく、「異文化間話者」という言葉を用いることを提案したが、そこに込められたのはこのような意味合いではないだろうか。近年、言語的・文化的にこれまで比較的均質だと思われていた国家にも外国から多数の人々が移民、一時滞在者あるいは観光客として入り、言語的にも文化的にも複雑な社会が形成されつつある。また、メディアの発達により、遠い異国の地で起こったことも時差無くすぐさま知ることができ、交通・運輸の発達のおかげで気軽に外国へ赴くこともできる。まさに、全世界的な多言語・多文化状況の時代を迎えつつある。そのような時代において、個人の思考・志向も多様化し、もはや〇〇人であるからこのように考える、△△に住んでいるからこのような慣習を持っている、と単純に考えることはできない。したがって、ある言語を用いる人たちが同じ思考を有し同じように話すという想定ほど現実にはそぐわないものはないだろう。

母語話者への優位性を語ろうとする言説はこれからもなお根強く存在するかもしれない。しかし、だからこそ、そのような言説に対しては常に警告を鳴らしていくことが必要であるといえる。母語話者信仰への批判的考察を無視して異言語教育／学習の今後を考えてみたところで、そこでの議論は空虚に響くことだろう。そのことを改めて確認する必要性を最後に強調しておきたい。

本論文は、異言語教育／学習において常識となっている母語話者の優位・特権性という主張について、その正当性を批判的に考察しようとするものである。その論述に当たっては、まず前半部分で、筆者の実施した日本のドイツ語教室におけるフィールドワークの結果、社会文化的な背景知識の所有が母語話者信仰を支える主要な根拠となっていることを確認している。次いで後半においては、そのような母語話者信仰の言説を、教授法としてのコミュニケーション・アプローチ、異言語教育における権力・言説・イデオロギー、言語と慣習との関係という個別テーマの展開に即して吟味し、母語話者の優位に繋がる議論がいかに関人の思い込みによるもので根拠に乏しいか、その矛盾を指摘することによって、最終的には、「柔軟で寛容な」異言語教育／学習の可能性を示唆するに至っている。

このように、従来英語以外の言語についてはあまり主題化されることのなかった「母語話者を絶対的な規範と見なさない外国語教育」の考え方について、ドイツ語を対象として詳細に論じたことは、本論文の有する斬新な着眼点であり、言語と文化との関係の本質をめぐる考察という点において、理論的・学術的に大きな意義を持つ。また、新たな教育実践の可能性を示唆するという点において、本論文は社会貢献の上でも有意義な研究といえる。さらには、母語話者を絶対視する思想の淵源について、先行研究よりも深く掘り下げて考察していることも高く評価できる。他方、本論文の知見を教育実践に還元する道筋についての議論が不足していること、また、母語話者信仰を支える「カテゴリー化」・「慣習」等に関する言説を取り上げる際に、その言説構成の分析がやや性急に批判へと傾斜して、論理性に不十分さが散見されることなど、若干不満の残る面もあるが、それらの短所も上述した本論文全体の積極的な価値を損なうものではない。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。